

Israel Monthly Trends

2026年7月

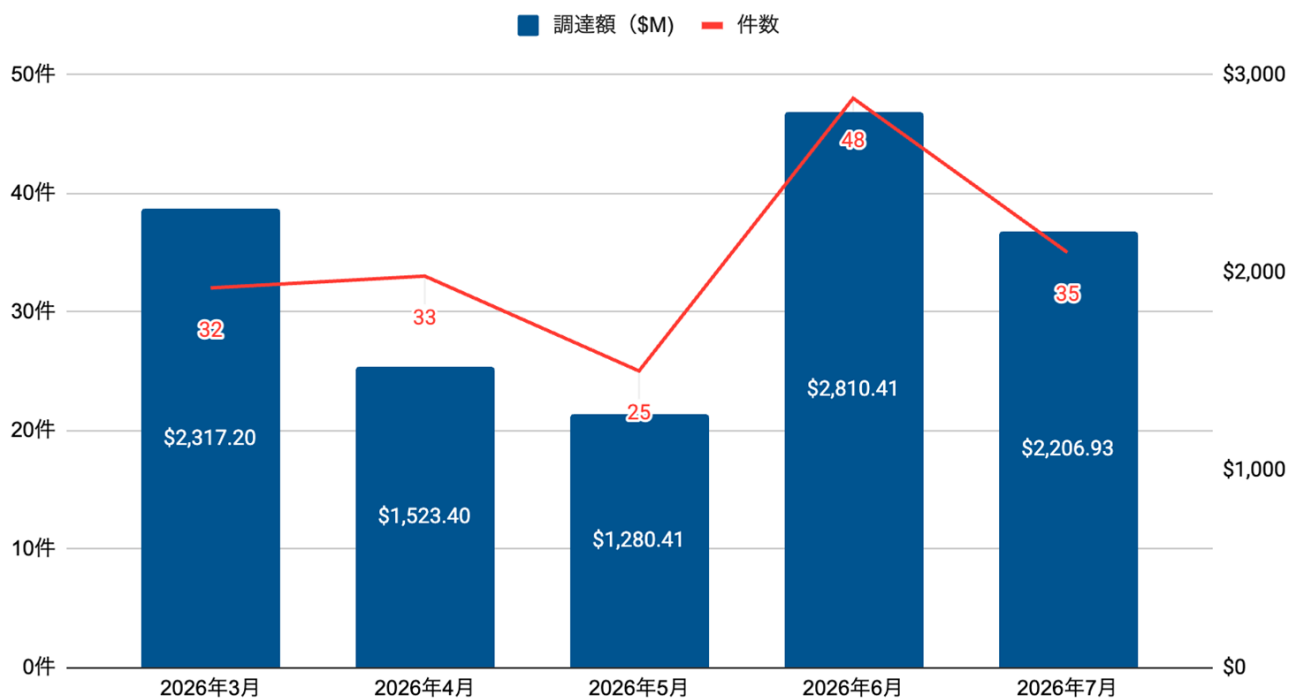
目次

- | | | |
|----|----------------------|-----|
| 1. | イスラエルの現在の状況_7月 | p.2 |
| 2. | 今月の注目テーマ：量子コンピューティング | p.3 |
| 3. | 協業事例紹介 | p.4 |

1. イスラエルの現在の状況_7月

2026年6月16日から2026年7月15日におけるスタートアップの資金調達動向は、案件数が35件で、調達額の合計は22億693万ドルであった。前期（2026年5月16日から6月15日）の48件・28億1,041万ドルと比べ、案件数は27.1%減少し、調達総額も21.5%減少した。1件当たりの平均調達額は約6,306万ドルとなり、前期の約5,855万ドルから約7.7%増加した。

イスラエル・ハイテク企業 月別資金調達推移



本レポートの毎月のデータ収集期間は、前月16日から当月15日までとなる。

当該期間においては、資金調達額ではConsumer-Oriented Software分野を中心に、Enterprise Software & Infrastructure分野およびHardware & Industrial分野でも大型案件がみられた。AppsFlyerはセカンダリーディールで12億ドル、フィフスラウンドで1億ドルを調達した。Dreamはサードラウンドで2億6,000万ドル、NextVisionはセカンダリーディールで2億ドル、Shorticalはデットファイナンスで1億ドルを調達した。これらの大型案件が資金流入を支えたものの、案件数と調達総額はいずれも前期を下回った。

2. 今月の注目テーマ：量子コンピューティング

量子コンピューティングとは、量子ビットの重ね合わせや干渉などの性質を利用し、従来型コンピューターでは処理が難しい計算を高速化する技術である。材料・分子シミュレーション、物流最適化、暗号関連処理などで活用が見込まれる。

主要な取り組みと成果

イスラエルでは、量子コンピューティングを次世代計算基盤の中核技術として位置付けている。米国や中国が大規模な量子ハードウェア開発を進める一方、イスラエルは制御システムやソフトウェア、アルゴリズムなどから成る量子技術の基盤領域である「エネーブリング・スタック」に重点を置いている。量子ハードウェアには超伝導方式、トラップドイオン方式、フォトニック方式など複数の方式があり、技術競争の行方はなお流動的である。そのため、特定のハードウェア方式に依存しない制御技術やソフトウェア開発に経営資源を集中することで、量子技術エコシステム全体を支える重要な役割を担っている。

具体的な取り組みとして、イスラエル国家量子イニシアティブ（INQI）やイスラエル量子コンピューティングセンター（IQCC）の整備が進められている。IQCCはテルアビブ大学に設置され、25量子ビットの超伝導量子プロセッサを含む複数方式の量子計算基盤を統合している。各システムはQuantum Machinesの共通制御プラットフォーム上で運用されており、研究者やスタートアップは専用設備を保有することなく、実機環境で量子プログラムの開発・検証を行うことができる。これにより、研究開発コストの低減と商用化に向けた検証の迅速化が図られている。

商用化の面でも、イスラエル企業による取り組みが進展している。Quantum Machinesは量子制御ハードウェアおよびソフトウェアを提供し、NVIDIAとの連携を通じて量子計算と従来型計算を組み合わせたハイブリッド処理の高度化を進めている。LightSolverは全光学式レーザー・プロセッシング・ユニット（LPU）を用い、物流や生産計画などの最適化問題への応用を推進している。Quantum Artはトラップドイオン方式の量子コンピューター開発に取り組むほか、Classiqは量子回路設計プラットフォームを提供している。これにより、量子物理の専門知識を持たない技術者でも量子アプリケーションの設計や開発に取り組みやすい環境が整いつつある。

今後の展望

今後は、量子ハードウェアを巡る技術競争が続く中で、イスラエルが強みを持つ制御技術、ソフトウェア、エラー緩和技術などの重要性が一層高まると見込まれる。米国、欧州、日本、韓国との連携を通じて、クラウドサービス、材料開発、交通・物流の最適化、量子通信など幅広い分野での活用拡大が期待される。また、製造業や情報サービス業においては、ポスト量子暗号、材料シミュレーション、サプライチェーン最適化などが有力な活用領域と考えられる。イスラエル企業は、研究開発段階の量子技術を産業利用へと橋渡しする重要な役割を担っており、量子技術の実用化を支える存在として国際的な存在感を高めている。

3. 量子コンピューティングの協業事例紹介

●Classiq × Rolls-Royce・NVIDIA（2023年5月）

ClassiqはRolls-RoyceおよびNVIDIAと連携し、ジェットエンジン設計に用いる計算流体力学（CFD）向けの量子回路を設計・シミュレーションした。39量子ビット、深さ1,000万層の大規模回路を対象とし、量子計算を産業分野のシミュレーションに応用する可能性を示した事例である。

参考：[NVIDIA Newsroom（2023年5月）](#)



Classiq (<https://www.classiq.io/>)

高水準の量子回路合成プラットフォームを提供するイスラエル企業である。量子アルゴリズムの設計から最適化、実装まで支援し、量子ソフトウェア開発の効率化を図っている。

●Quantum Machines × QuantWare（2023年6月）

Quantum Machinesは、オランダのQuantWareと提携し、量子制御システム「OPX+」と25量子ビットの超伝導量子プロセッサ「Contralto」を事前統合した。量子コンピューターの構築時の統合作業や校正作業を簡素化し、研究開発期間の短縮を図る取り組みである。

参考：[Quantum Machines プレスリリース（2023年6月）](#)



Quantum Machines (<https://www.quantum-machines.co/>)

量子コンピューターの制御・運用を担う「Quantum Orchestration Platform」を提供するイスラエル企業である。量子制御ハードウェアとソフトウェアの両面でソリューションを展開している。

●Qedma × AWS・IonQ（2024年3月）

QedmaはAWSのAmazon Braket Directを通じて、IonQの量子ハードウェア上でエラー緩和技術の実証を行った。量子アルゴリズム実行時のノイズの影響を低減し、現在の量子デバイスにおける計算精度の向上を目指した取り組みである。

参考：[AWS Quantum Computing Blog（2024年3月）](#)



Qedma (<https://www.qedma.com/>)

量子コンピューティング向けのエラー抑制・エラー緩和ソフトウェアを開発するイスラエル企業である。量子コンピューターの計算精度向上を支援し、量子技術の実用化を後押ししている。